



終わりの始まり

千葉大学園芸学部園芸学科 花卉園芸学研究室 4年

池田 佳織

花卉研 年間スケジュール

昨年の10月、後期の授業開始とともに私たちの花卉研生活が始まりました。最初の1ヶ月は戸定祭で開く花屋さんの準備。お店に並ぶ色とりどりの植物の一部は、自分たちで栽培します。経験の無い私たちは、灌水やハウスの換気の仕方、草刈り鎌の研ぎ方から先輩方に教わりました。お客さんの質問にしどろもどろになりながらも、戸定祭での成功を経て、ようやく花卉研に馴染めたように感じました。

そして秋の種子採り。ここ数年、年に3回ほど行われている種子採りは、関東周辺で採取した様々な植物の種子を、精製、乾燥、袋詰めして、海外の大学や植物園に郵送するというものです。ゼミ旅行気分で行くのかと思いきや、車が停まるのはカエデやウツギの種子が採れる山中。紅葉にも少し早い季節でしたが、地域特有の植物を目にしたり、車中で先輩方の研究や日々の生活の話などを聞いたり、よりいっそう花卉研の一員らしくなれました。そしてまた先生や先輩方の植物の知識の豊富さに驚かされました。

年末には各人の研究テーマも決まり、ここから本当の花研生活に入ります。一人ハウス一棟の管理を任せられ、毎朝の灌水や除草、播種、施肥、薬剤散布など、自分の研究する植物は自分で栽培するのが長年変わらない花卉研の基本です。年が明け、先輩方の卒論、修論発表会での姿に来年の自分を重ね、これからの指標を得ると同時に身の引き締まる思いでした。

3月の大震災では、幸いなことに大きな被害はありませんでしたが、この影響で大学全体の卒業式や花葉会のサマーセミナーが中止になってしまったことは残念としか言いようがありません。春頃からそれぞれの実験も本格的に始動し、DNAや色素を調べる機械を順番待ちすることもあります。合間に、花産業必修1000属検定の勉強をしたり、大学生らしくバーベキューや小

旅行、花火などをしたりと充実した日々を送っています。

花卉研の視点

年中、植物に触れていると、通学時にも外出時にもついつい花卉研の視点で周囲を見渡している自分がいます。その花屋さんのディスプレイは工夫してあるなどか、この花壇は水不足だなどか、このシステムは花に応用できないのだろうかとか。卒業後、花産業に携わる人が多い花卉研は、将来のため、知識や技術の基礎を学び考えることができる最高の場だと感じます。残り少しの学生生活を、大切に、有意義に過ごそうと思います。

終わりの始まり

「フィールドからDNAまで」を合言葉に、これまで花卉研を引っ張って来てくださった安藤敏夫教授が、今年度を以て退官されます。1980年から花卉研の先生として数多くの学生を世に送り出し、1997年からは花葉会の会長も務められています。学生時代も含めると30余年も花卉研とともに歩んでこられたことになりませんが、その間、数々の書物や論文を執筆し、花業界の権威として尊敬を集めてきました。近年の花研の発展は安藤先生の教えの賜物と言っても過言ではないでしょう。そんな安藤先生の退官は長い花卉研の歴史の中で大きな節目になるのかもしれない。

最近、花卉研の卒業生にお話を聞かせていただく機会がありました。あまり覚えていないよと言いつつも、南米調査や原種ハウスの思い出や、先生や同期の方々の武勇伝を楽しそうに話してくださいました。数年前に研究棟の建て替えもあり、実験の環境や学生の雰囲気、研究対象など、変わってしまったことはきっと多いのでしょう。けれど植物に対する熱意や花卉研の一体感は、失われることなく受け継がれてゆくものなのだと思います。

圃場で汗を流し、実験に頭を悩ませ、あっという間の一年が過ぎて、今年も花卉研に新しい風がやってきました。先生方、先輩方から教わったことに自分自身が学びとったことを載せて後輩たちに伝えてゆけたらと思います。

